
Long Time No See

手回しオルガン弾き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Long Time No See

【Nコード】

N3680S

【作者名】

手回しオルガン弾き

【あらすじ】

てきとうににちじょうを綴ったものです。

部屋は青い。重なりあう家々の上で無関心な月が見つめている。だからつい見てしまう。彼女はふとんから浅黒い背中を出して丸くなっている。背骨が三つ浮き出ている。茶色と黒の混ざる乱れた髪の下で、彼女の身体はゆっくりと波打っている。

きのこの夜、セックスの後、彼女は僕をからかった。

考えすぎなのよ、いつもいつも考えすぎなのよ。そう言っている今も考え事をしているんでしょ。

呆れながら笑ってそう言った。

彼女が僕の下で喘いでいた時、窓から外を見て、急にこれまで読んだ本のリストが頭に浮かんだ。誰だったかが書いた小説のあらすじが浮かんで憂鬱になった。

思索に夢中になるあまり、いつしか現実と妄想の境目がつかなくなり、気がつくと精神病院のベッドに運ばれていたという男の話だ。確かボルヘスだったと思う。

冷気が窓から煙っている。

もう少しで夜が明ける。窓から見える外の景色は濃い青に浸っている。部屋のドアがわずかに開いているのに気づいた。外の風でいつの間にか開いてしまったのだろう。数冊の本が床に落ちている。ホメロスとニーチェと *tropic of cancer* と老子とノート。汚い字で書かれたメモが数枚。きつと誰にも読めないだろう、

僕にさえ。

ここから見えるわずかに開いたドアの隙間に、空のペットボトルが並んでいる。小さな水滴がつき、底に生命の跡のような黒い汁が残っている。

耳を澄ませるとごうごうと聞こえる。風だか何かだかがドアの向こうを通りすぎていく。薄暗い背景の中を陽炎のような影が通るような気がした。

両手で作った溝に頭を乗せて、彼女は深く眠っている。小さな寝息を立てながら骨ばった肩を上下させている。枕元に置いた彼女のコンタクトレンズが乾いてしぼんでいる。

彼女の匂いがする。シャンプーの人工的な匂いと、彼女の家の古びた匂いと、それから女が持つ性的な体臭。

階段をこつそりと上がる音が聞こえる。慎重に足を乗せる抑えられた床の軋む音が聞こえる。

彼女は大きく息を吸うとため息をついた。後ろから覆いかぶさるように密着するととても熱い。彼女はますます熱を帯びながら小さく丸まっていく。

何かドアの隙間からこちらを覗いている。暗闇という点描の中で形を帯びては消える不思議な姿だった。一瞬一瞬に違う何かへと揺らめいて見えた。

それがなにであるかと思いつけない。わかるのは、僕がそれを待っていたということだ。なのにそれを拒まなくてはならないのだとい

う想いが浮かんだ。麻薬中毒者の麻薬に対する想いに似ている。

風があるらしい。外で風が鳴る音に、壁に掛けたラグが揺れる。ほつれた先端をひらひらと二度はためかせた。ドアがもう少し開く。

立っているこの姿はなんだろう。思い出せない。単なる点描の集合に過ぎないのかも知れない。葉々の重なり、人の顔を見出すのと同じかも知れない。しかしそうではないと僕は感じている。

カーテンを開けたままの窓ガラスの向こうで、強い風が吹いている。訴えかけるような哀れな音が窓ガラスの隙間で鳴っている。外の壁に絡みついた蔦が揺れるたびに、ガラスに姿を見せる。昼間には艶めいて見えた葉々が薄黒く沈んで見える。その奥に暗闇が広がっている。なだらかな小さな草原に暗闇が溜まり、家々の影がそれを取り囲んでいる。遠くに見える一本の木のすぐ背後に、古い木造の家が一軒見えた。段々状の明るい雲が遠くまで続いている。動きは速い。例えば　と僕は思う。例えば、結局あらゆるこの世のものとがある程度の決められた法則によって動くなら、月の光りを求めて競いあっているように見える雲々も、飛んで行きそうな蔦も、次第に小さくなりつつある熱を帯びた彼女も、青い月も、ドアの隙間のそれも、それから僕も、結局同じじゃないだろうか。陽だまりに猫が寄り集まり、砂糖に蟻が群がり、月の周りを雲が過ぎ、女は熱を帯びて眠り、点描が集まり何かに見せ、世界が進行する。

ドアの隙間に集まった点描を僕は次第に思い出しつつある。多分これから長く付き合っていくことになるだろうということも。快樂と死と絶望が同じだと知っている彼が耳元で誘うのだ。自殺の欲望と知的好奇心と性的な欲望を一つに溶け混ぜては地面にとろ流す。僕は哀れに地面を這いずるだろう。その哀れさの中にさえ快樂を見出すということを知っているからだ。こうして世界が進行する。

熱を帯びた彼女はこめかみを汗で湿らせている。柔らかな吸いつきの良い背中も汗で濡れている。彼女はまるで熱に向かっていくかのようだ。熱の中心へと、小さくなりながら丸まっていくな。

ドアはすっかり開き、点描はすっかり形を帯びている。

小さくなり続けた彼女は、布団から消えて、今はいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3680s/>

Long Time No See

2011年10月8日22時53分発行